

## 講演会要旨

1. 開催日 2015年11月6日
2. 会場 13-B113
3. 講演者 小川哲也先生（東京大学大学院総合文化研究科）
4. 演題 歩行と走行を実現する中枢神経機構

ヒトの歩行と走行はともに、左右の下肢三関節（股、膝、足）の屈曲―伸展の繰り返しによって実現し、したがって、使用する筋も大部分が共有される。一方で、移動運動に関わる神経制御機構について調べると、例えば動物研究では、同じ筋を使用する運動（ゼブラフィッシュの泳ぎ、マウスのステップング、など）も運動モードごとに異なる神経細胞群が関与することが近年明らかとなってきた。このような結果を参照すると、ヒトの歩行や走行も単に速度が異なるというだけでなく、中枢神経系はそれぞれを全く別個の運動として制御している可能性があると考えられた。そこで、筆者らは特殊な力学的環境下の歩行と走行に生じる学習効果に着目した行動科学的検証を行った。

トレッドミル上での通常の歩行や走行時では左右の下肢は対称に近い力発揮をするが、左右2枚のベルトが別々の速度で動作する変則的な条件下で一定時間歩行または走行すると、課された条件下でスムーズな歩行や走行を実現するための学習が成立する。歩行で成立した学習は、その後の通常歩行における下肢の力発揮が非対称となる運動パターンを発現させ、走行を学習するとその後の通常走行が非対称となる学習効果が顕在化する。一方で、これらの学習効果は歩行、走行間ではほとんど共有されなかった。すなわち、歩行と走行の運動記憶はそれぞれ独立で起こり、この結果は、下肢の共通した筋の運動により実現するヒトの歩行と走行も、その神経制御機構はそれぞれに個別に存在する可能性を示すものである。従って、中枢神経系は歩行と走行を単に速度の違う運動としてではなく、別々の運動として制御していることが明らかとなった。このような基礎研究で得られた結果は、スポーツやリハビリなどのトレーニング場面を想定すると、少なくとも神経科学の立場からすれば、歩行のトレーニングでは走行のパフォーマンス向上は見込めず、また走行をトレーニングしても歩行のパフォーマンスが向上しないことを意味している。

本研究会では、歩行や走行を実現する基礎的な神経機構の紹介に始まり、前述したこれらの研究の方法や結果を詳細に紹介する。

（文責 笹川俊）

1. 開催日 2015年11月2日(月)
2. 会場 17号館317室
3. 講演者 千野裕子氏
4. 演題 下北沢というトポス——「小劇場演劇」の現場から——

深澤担当の「日本芸能論B」では、中世に興った「能楽」について講義している。しかし古典芸能としての「能楽」へのアプローチは、現代の若者たちにとって、かなり至難の業である。そこで本講義では、補助線として近現代の演劇の歴史をまず概説し、それらの知識を前提に、それらとの「比較」の中で、古典芸能としての「能楽」の特質を明らかにしていくという迂路を採っている。その意図をさらに明確化するために、演劇の現場で、いままさに活躍中の新劇の「俳優」をゲスト講師に招き、その生の声を学生たちに聞かせた。

今回ゲスト講師として招いた千野裕子氏は、学習院大学で日本古典文学の研鑽をつみ、その知識・教養を生かして、自ら劇団「貴社の記者は汽車で帰社」を組織し、そのシナリオライター兼主演女優として年二回の公演活動を主導するとともに、NHKの大河ドラマを始めとして、テレビや映画にしばしば出演している新進気鋭の現役の女優である。この千野氏を招いて、今現在の演劇やドラマ作りの現場体験を、あれこれお聞きすることで、「日本芸能論B」の科目の趣旨が、より一層学生たちに理解され、それとの比較の中で能楽へのアプローチの一助となったものと思料する。

講演内容は、自己の演劇活動の紹介を踏まえつつ、日本における近代演劇（いわゆる「新劇」）の成り立ちの歴史をまず概説していただいた。そして本講演の主要テーマである、「小劇場演劇」のメッカともいべき下北沢の街に散在する小劇場の運営形態や、各々の小劇団の内情などに至るまで、微に入り細に入り、パワーポイントの画面を使って分かりやすく説明していただいた。今現在のホットな話題ということもあって、受講学生は食い入るように耳をそばだてて聞いていた。また講演終了後の意見交換の場でも、積極的な質問が飛び交った。

(文責 深澤徹)